



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における青年団活動の担い手像：アンケート調査から
Author(s)	大坂, 祐二; Yuji Osaka
Citation	社会教育研究, 13, 43-57
Issue Date	1993-06
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28495">https://hdl.handle.net/2115/28495</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P43-57.pdf



# 北海道における青年団活動の担い手像

— アンケート調査から —

大坂 祐二

## 1. はじめに

この研究ノートでは筆者が関わったアンケート調査をもとに、北海道の青年団が組織の基盤としている青年の状況、特に農業青年と増えている市街地・労働者青年のそれぞれの特徴について概観し、活動の担い手像が変化しつつある中で、青年自身による青年団活動見直しのもつ意味についても考察したい。

はじめに、このようなテーマを設定した問題関心と、それに至る最近の経験を、若干長くなるが述べておきたい。

今年（1993年）に入って全道レベル、町村レベルの2つの青年団（体）の青研集会（青年問題研究集会）に参加する機会を得た。それらは、いま青年団活動に取り組んでいる青年たちが、自分たちの足元から活動のあり方を見つめなおしているという動きを感じるものだった。

第30回全道青年研究大会（1993年1月23～25日、於札幌市、主催・北海道青年団体協議会（以下、道青協））は、30回のいわば記念大会になるはずであった。しかし、参加者は札幌近郊を中心に20名ほどにとどまり、例年に比べてずいぶん寂しい大会になった。5つを予定していた分科会も3つに減らしての開催になった。大会のなかで興味深かったのは、分科会での議論はもちろんだが、担当役員が大会1日目の夜に急きょ、交流会を設定したことだった。プログラムとしては2日目の夜に交歓会が設けられており、初日の夜は「自由交流」となっている（その実は道内各地から集まった青年たちが「札幌の夜」を楽しむのだが）。それを全員が車座になっての交流会とし、この日は深夜まで語りあいが続いた。全国青研などではよく見られる光景だが、全道青研としてはあまり例のないことのように感じた。道青協の平成5年度定期大会議案書では、この大会について「各地でリーダーの抱える問題、悩みが多くだされて、仲間の実践を参考に新たな方向性を見出だすきっかけが出来たが」、「各加盟団の状況を把握出来ず、また青研の意義を深く理解して頂けなかったこと、内容に詰め甘さがあったことなど反省点が多くあります」と総括している。担当役員にしてみれば、各地のリーダーが抱えている悩みや加盟団の状況は膝をつきあわせた話し合いがなければつかめない、という思いであったのだろう。青研集会のあり方や全道組織としての活動のあり方を見直そうとする動きがここにはある。

町村レベルの青研集会としては、A町の青年問題研究集会に参加することができた。ここは「若

人の集い」と呼ばれる市街地青年を含む組織が長野県連青や福島県連青などの青研集会上に学び、教育委員会主催、若人の集い・青研実行委員会主管のかたちで9年間青研を開催しているところである。ここでも1日目夜の交流会でのごとく、参加者のひとりが私のところにやってきて「大坂さん、青研って何をするとおころなんですか」と聞くのだ。彼女は今回初めて参加した訳ではない。何度か参加しているし、実行委員会を手伝ったりもしているはずだ。聞けば毎年同じ様なテーマを掲げ、分科会でも似たような議論をし、それが必ずしも次の年の活動に生かされていない、そんな疑問を抱いているようだった。さっそく翌日の分科会で話題にしたが、毎年の事業の繰り返しの中で、なぜそのことをやるのか、取り組みの中で自分たちがどのように成長したのか確かめられていない、ということが大いに議論となった。

さて、しばらくして、A町「若人の集い」にも参加しながら、「集い」とは別に農村地域に基盤をおいて活動していた青年団、A町青年団体協議会が解散したとの報が舞い込んできた。また、道青協の平成5年度定期大会では、札幌近郊のB市連合青年会が会員の減少から上部団体の行事への取り組みが負担になっており、立て直しのためにも道青協への加盟をとりやめたいとの申し出を行った。結局、B市青年団は当面道青協への加盟を続けることになったのだが、活動が困難になっている2つの地域は、あえてあげるとすれば次のような点が共通しているだろう。A町は道や国の出先機関も多い「転勤族」の町であり、B市は札幌のベッドタウンとして人口を増やしてきた。しかし、それぞれの青年団は農村地域を基盤に活動を続け、市街地青年との結び付きがあまりないか、あっても青年団活動に生かせていないのではないか。

青年自身による青年団活動の見直しと、農村地域における活動の困難という2つの状況が、たまたまA町で重なったこともあって、それらがどのように関連するのかということが筆者の問題関心にはある。もちろん青年自身による青年団活動の見直しには、活動のあり方それ自体からくる問題もあろう。しかし、活動のあり方（内容や方法、組織）の検討には、そこで活動する青年たちの労働・生活や意識、要求などの検討が欠かせない。

なおここでとりあげるアンケート調査は、集計結果の概要がすでに報告されているが、2次集計やくわしい分析は今後に残されている。小論はそれらの分析に当たっての試論として位置づけられるもので、なかでふれている統計分析なども不十分なものになっていることをお断りしておく。

## 2. 「青年団1000人アンケート」結果の特徴

道青協が設置する北海道青年団研究所は、「青年の多様化した生活意識、変化した行動様式を見つめ直し、とらえ直し、私たち一人ひとりの生活の中にある問題を浮かび上がらせ」「これからの青年団活動の方向性を明らかにする」ことをねらいに、1992年度の活動として「青年団1000人アンケート」と銘打ったアンケート調査を行った。筆者はこの調査研究に、研究員の一人として参加する機

会に恵まれた。

アンケートは道青協に加盟する116の市町村団から33団体を抽出、その全団員を対象とし、1387通を配布した。回答は20市町村、431人から得ることが出来た。20市町村への配布数に対する回収率は50.1%である。1次集計結果とその要点は、すでに出されている報告書（北海道青年団研究所『素顔の仲間たちを見つめて——1000人アンケート報告書——』、北海道青年団体協議会、1993年3月）を参照されたい。

報告書をまとめるための議論の中で、道青協役員OBである研究員諸兄からは様々な感想が出された。現役青年団員について感じている事が数字で裏付けられた、ほぼ予想した通りであった点もあるが、意外だった、あるいはショックだったという点も少なくなかったようである。

### ① 農業青年の減少

ひとつめには、アンケートの回答者のうち、農林漁業に従事する青年が半数を割ったことが挙げられる。回答者の職業は431人中191人が農業、5人が漁業で、両者合わせて45.5%である。会社員20.4%、公務員15.1%、団体職員10.2%がこれに続き、合わせて45.7%と農漁業者とほぼ同数になる（表1）。（なお以下の「1000人アンケート」の分析では、農林漁業の青年を「農業青年」、それ以外を「労働者青年」と便宜上呼ぶことにする。従って「労働者青年」には商工自営業主やその家族従業者、学生なども含まれることになる。）

全国的に見れば、半数を割ったとはいえ農業青年が4割以上を占めている県団はまずないだろう。

表1 回答者の年齢層別・職業別構成

	男		女		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
20歳未満	34	10.5%	14	13.0%	48	11.1%
20～24歳	174	53.9%	75	69.4%	249	57.8%
25～29歳	103	31.9%	18	16.7%	121	28.1%
30歳以上	12	3.7%	1	0.9%	13	3.0%
農業	183	56.7%	8	7.4%	191	44.3%
林業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
漁業	5	1.5%	0	0.0%	5	1.2%
会社員	51	15.8%	37	34.3%	88	20.4%
公務員	51	15.8%	14	13.0%	65	15.1%
団体職員	13	4.0%	31	28.7%	44	10.2%
自営業	10	3.1%	3	2.8%	13	3.0%
学生	4	1.2%	0	0.0%	4	0.9%
家事手伝い	3	0.9%	2	1.9%	5	1.2%
失業中	1	0.3%	0	0.0%	1	0.2%
その他	2	0.6%	13	12.0%	15	3.5%
合計	323	100.0%	108	100.0%	431	100.0%

全国の青年団活動家が集う全国青年問題研究集会の参加者アンケートでも、1981年3月の第26回大会ではすでに会社員、公務員、団体職員で約67%を占め、農業青年は13.3%にすぎない<sup>(1)</sup>。しかし、道青協が行ったこれまでの調査と比べると、北海道の青年団の主要な担い手であった農業青年が半数を割ったことの意味は大きい。1981年度の調査<sup>(2)</sup>では、男性会員の80%、女性会員の22%が農業青年となっている。また86年度の調査<sup>(3)</sup>では農業青年は男性の73%、女性の7%であった。今回の調査では男性の52.5%、女性の9.5%が農業青年である。過去2回の調査は市町村団調査であり、団員へのアンケート調査とは単純に比較できないが、80年代後半を通して特に男性会員で農業青年が減っていることがわかる。

② 「豊かな」生活

2つめには、90%の青年が自動車を持ち、82%がテレビを持っているといった、物質的には「ゆたか」な生活を送っていることである。ほかにはビデオ67%、オーディオセット64%、パソコン・ワープロ35%などとなっている。

こうした生活は、ひと月の収入が15万円以下の者が53%、10万円に満たない者は2割を占める(農業、自営業などを含む)というなかでは、親からの援助やローンによって成り立っているものであろう。実際、親と同居しているものは回答者の86.5%、農業青年をのぞいても78%になる。また、10万円以下のローンがあるというものは43%、100万円以上というものも17%いる。

青年たちの休日の過ごし方で多いのは、ごろ寝58%、ドライブ46%、ショッピング34%となっている(表2)。ひと月にお酒やカラオケに行く回数は0～2回というものが53%、1年間にコンサー

表2 休日の過ごし方(4つまで)

	件数	(N=431)
1. ごろ寝テレビ・ビデオ	252	58.5%
2. パチンコ	100	23.2%
3. ギャンブル	22	5.1%
4. ファミコン	57	13.2%
5. スポーツ	101	23.4%
6. 旅行・ハイキング	27	6.3%
7. ドライブ	200	46.4%
8. ゴルフ	17	3.9%
9. ショッピング	146	33.9%
10. 映画	15	3.5%
11. デート	96	22.3%
12. 家事・家庭サービス	62	14.4%
13. サークル・集団活動	74	17.2%
14. 読書	42	9.7%
15. カラオケボックス	30	7.0%
16. その他	33	7.7%

表3 余暇生活への不満の理由

	件数	(N=190)
1. 仕事等で忙しく楽しむゆとり、気力がない	86	45.3%
2. お金がたりない	61	32.1%
3. 地域にそういうことを楽しむ施設、機会が少ない	25	13.2%
4. 一緒に楽しむ仲間がいない	17	8.9%
5. その他	11	5.8%

トや公演を観に行く回数が0回というものは48%と、「今どきの若者」としてはずいぶんつましく見える。それでも、こうした余暇の過ごし方に「やや満足」というものは43%、「満足」を合わせると53%になる。一方、「不満」「やや不満」とするものが最も多く挙げている理由は、仕事が忙しくゆとりがないこと(45%)であった(表3)。青年たちの生活の「豊かさ」が、「ゆとり」を犠牲にした上で成り立っているものであることをうかがわせる。

### ③ 青年団の仲間づくり

休日の過ごし方の中で、「サークル活動・集団活動」をあげたものは17%にとどまった。これは、今回の調査にあたって参考にした日本青年団協議会の調査<sup>(4)</sup>で同じ項目が43%であるのと比べるとかなり少ない。日青協の調査は青年団員以外も調査対象に含むものであったが、団員を対象にした今回の調査でこのような結果になったのは、活動に魅力がないのか、休日は自分の時間にあてているのか、設問の「サークル活動・集団活動」を青年団とは分けて考えたのか、など議論になる点である。

それでも「青年団活動を通して何を得たと思いますか」との設問からは、青年たちが活動から多

表4 青年団活動を通して得たこと(3つまでの複数解答)

	件数	(N=431)
1. 友人や仲間が得られる	318	73.8%
2. 異性と交際できる	39	9.0%
3. 個人的にやりたいことを効果的に達成できる	21	4.9%
4. 世間や社会のいろいろなことがわかり目がひらかれる	97	22.5%
5. 仕事や勉強のほかに熱中できるものが得られる	54	12.5%
6. 自分の考え方や生き方が確かなものになる	32	7.4%
7. 人間として持つべき素質や豊かな教養が身につく	49	11.4%
8. 他の人と共同で活動する喜びを味わえる	134	31.1%
9. 寂しさや不安がなくなる	14	3.2%
10. 暇つぶしや退屈しのぎになる	57	13.2%
11. その他	14	3.2%

表5 青年団に期待する活動（3つまでの複数回答）

	件数	(N=431)
1. 郷土芸能の伝承、発展	40	9.3%
2. レベルの向上を目指したスポーツ活動	93	21.6%
3. レベルの向上を目指した文化活動	64	14.8%
4. 地域の社会福祉のためのボランティア活動	72	16.7%
5. 世の中の仕組みや教養を高める学習活動	49	11.4%
6. 地域発展のための提言や活動	131	30.4%
7. 同世代との仲間づくり活動	229	53.1%
8. 異世代との交流活動	108	25.1%
9. その他	17	3.9%

くのことを得ていることがわかる。特に「友人や仲間が得られる」ことをあげるものは74%、およそ4人にひとりに達する（表4）。今後期待する活動にも53%が「同世代との仲間づくり活動」をあげている（表5）。

青年団活動を通して得たもので「仲間づくり」に次いで多かったのは、「他の人と共同で活動する喜びを味わえる」（31%）であった。青年たちが青年団の行事や様々な活動を通じて仲間をつくり、「共同で活動する喜び」を経験していることがわかる。ではこうした行事を離れたところで、青年たちはどのようにつきあっているのだろうか。悩みや心配ごとがあるときの相談相手についてたずねたところ、「学校の同級生や先輩」が28%で最も多く、「団体・グループの仲間」が22%でこれに続く。前述の日青協の調査では「団体・グループの仲間」は30%で1位、青年団員では40%になっており、これと比較するとやや低いと言える。また1000人アンケートでは、15%は悩みがあっても「誰とも相談しない」と答えている。4人にひとりが青年団に入って仲間づくりが出来たとしている一方で、15%とは言え、悩みがあっても誰にも相談しない「仲間」がいる。このことが今回の調査結果でとりわけ重視しなければならない点だというのが、研究員に共通の感想であった。

#### ④ 地域活動・地域づくりへの期待

青年団活動を通して得たもののうち、「仲間づくり」「共同で活動する喜び」について多かったのは、「世間や社会のいろいろなことがわかり目がひらかれる」（23%）であった。また、期待する活動では2位に「地域発展のための提言や活動」（30%）、3位に「異世代との交流活動」（25%）があがっている。青年団活動を通して少なくない青年たちが地域や社会のことに目を向け、世代間の交流や地域づくりの活動をしたいと考えていることがわかる。

過疎化の進行や高齢化、地域の基幹産業の衰退などを背景にして、すでに多くの青年団がイベント、ボランティア活動、文化活動など様々な形で「地域づくり」に関わる取り組みを行っている。「お祭り、イベントなどで活性化をはかる」ことに青年の役割を見いだそうとする青年が半数を超え

表6 まちづくりのために青年がすべきこと（複数回答）

	件数	(N=431)
1. 経営の改善や新しい技術の導入をいち早くおこなう	50	11.6%
2. 農業青年や商工・観光の青年などが協力して特産品づくりをする	82	19.0%
3. お祭り、イベントなどで活性化をはかる	222	51.5%
4. 社会奉仕や文化活動を通じて住民同士の交流をはかる	101	23.4%
5. まちづくりの先進地の視察、交流などをおこなう	115	26.7%
6. 地域の青年どうしが話し合い、自分たちの町の問題を見直す	161	37.4%
7. その他	23	5.3%
無回答	48	11.1%

ているのは、多くの青年団がこのような活動を行っている実態を反映しているのだろう（表6）。しかし、いわゆる一村一品運動と同様に、イベントの「地域づくり」活動としての限界を指摘する声も少なくない。そのなかで、4割近くの青年が「地域の青年どうしが話し合い、自分たちの町の問題を見直す」ことが大事だと考えていることは、注目すべきだろう。

「地域の青年どうしが話し合い、自分たちの町の問題を見直す」そうとすると、その話し合いの場に参加する青年が特定の立場や職業、階層などに限定される理由はない。もちろん、それぞれの職業や階層には固有の課題があり、その立場から地域づくりのあり方に独自の要求が出されるのは、当然のことであろう。しかし、それらの諸要求の調整はなかなか進まず、地域間、階層間、世代間などの対立となっていることが、実際には多いのではないだろうか。

地域青年団運動は戦後のあゆみのなかで、青年団とはその地域に住んでいる青年であれば、思想、信条、職業、趣味、性別などにかかわらず自由に加入できるものである、という性格を確認してきた。このような性格は、地域に住む様々な立場の青年がお互いに話し合い、地域の問題を見直すそうとするとときに、その要となる可能性を持つものであると言える。この可能性を現実のものにしようとするとき、実際の活動がどのような層の青年たちを組織しているのか、青年たちのどのような要求に答えているのかを確かめておくことは意味のあることだろう。この点は次の節でふれることにする。

### 3. 農村に住む青年労働者の状態

アンケート回答者の職業構成で見ると、北海道の青年団員のうち農林漁業に就いているものが半数を割り、会社員、公務員など労働者が半数近くに及んでいることは既に見た通りである。1990年の国勢調査から青年層（15～29歳）の構成を見ると、労働人口のうち1次産業就業者4.3%に対

して、2次・3次産業に就業する労働者は85.7%と圧倒的多数を占めている〈表7〉。青年労働力人口の35.7%が集中している札幌市(15歳以上の労働力人口全体では29.3%)をのぞいても、1次産業就業者は7%にすぎない。数のうえで見る限り、市街地・労働者の青年層を組織することなしに、青年団の仲間を増やしてゆくことが困難であることは明らかである。

全国的に見れば、すでに1960年代には労働者が青年団の中の多数派になっている。特に「在村通勤青年」の存在は、勤労青年教育における学習主体の問題として焦点になっていった<sup>(5)</sup>。このことを念頭に置きながら、「1000人アンケート」から北海道の青年団に結集している労働者青年の特徴について見てゆこう。

アンケートでは親の職業については聞いていないが、回答者の8割以上、農業以外の青年でも78%が親と同居していることはすでに述べた。また農業以外の青年の83%が、いま住んでいる市町村の中で勤めている。「在村通勤青年」の問題とは性格を異にしている点である。これはまた、地元働き口がなければマチを離れるしかない、という状況の裏返しでもあろう。60年代における農業青年の労働者化が在村通勤青年の増加という形をとったのは、「『地域開発』『新産業体制』のもとで、

表7 北海道の青年人口の構成

	15～19歳	20～24歳	25～29歳
総数	443,367 100.0%	364,934 100.0%	355,206 100.0%
労働力人口	20.4%(100.0%)	77.6%(100.0%)	77.1%(100.0%)
就業者	18.4%(89.9%)	73.5%(94.7%)	73.9%(96.0%)
1次産業	0.7%(3.4%)	2.6%(3.3%)	4.4%(5.7%)
2次産業	4.0%(19.7%)	13.6%(17.6%)	14.3%(18.6%)
3次産業	13.4%(65.7%)	56.8%(73.2%)	54.9%(71.2%)
2次・3次産業のうち			
雇用者	16.9%(82.7%)	67.9%(87.5%)	65.3%(84.7%)
役員	0.1%(0.5%)	0.6%(0.8%)	1.1%(1.4%)
業主	0.2%(0.8%)	0.9%(1.2%)	1.4%(1.8%)
家族従業・ 家庭内職者	0.3%(1.4%)	1.0%(1.3%)	1.4%(1.8%)
完全失業者	2.1%(10.1%)	4.1%(5.3%)	3.1%(4.0%)
非労働力人口	79.3%	21.7%	22.5%
家事	1.0%	6.6%	20.7%
通学	77.6%	14.2%	0.8%
その他	0.7%	1.0%	1.0%

1990年国勢調査より作成

表 8 現在の市町村以外での居住の経験

	件数	全体 (N=431)	農業 (N=196)	労働者 (N=235)
1. ある (学生として)	140	32.5%	43.4%	23.4%
2. // (就職して)	38	8.8%	6.6%	10.6%
3. // (その他の理由で)	32	7.4%	4.6%	9.8%
4. ない	218	50.6%	45.4%	54.9%

大企業とその関連、下請け企業が、国家と地方自治体の援助を直接、間接にうけて農村地帯に進出し、それにともなって道路、その他の交通機関の発達をみた」ことによるとされる<sup>(6)</sup>。しかし、大企業の進出先としての位置づけが与えられなかった、道央圏を除く多くの地域では、在村通勤という形は一般的でないと思われる。

上記の点とも関わって、アンケートから指摘できるもう一つの特徴として、農業青年に比べて労働者青年のほうが、いま住んでいる市町村以外での居住の経験がやや少ないことがあげられる。「現在の市町村以外に居住したことがありますか(6カ月以上)」との設問に対する回答が〈表8〉であるが、「ない」と答えたものは労働者青年の方が10ポイントほど多い。一方、「ある」というものでは特に学生として他市町村に住んでいたというものが多く、農業青年は労働者青年を20ポイント上回っている。回答者の学歴を見ると、農業青年では高校卒51%、短大卒29%、大学卒7%、労働者青年では高校卒68%、短大卒7%、大学卒10%となっている。これは農業後継者の「高学歴化」とともに、大学新卒者の就職先が彼らの「地元」では限られていることによるのだろう。

栗原のみは、いわゆるUターン青年が農業・農村に元気を吹き込んでいる要因として、都会の消費者のことを知っている点と、サラリーマンの悲哀を実感し、もっと人間らしく働こうと農業を選んでいる点を指摘している<sup>(7)</sup>。後者の点は学生として他市町村で暮らしていた青年には必ずしもあてはまらないかもしれない。しかし、住んでいるマチを離れてみて、あらためて地域のこと、農業のことを見直した経験をもつ青年は少なくないだろう。これに対してアンケート結果からは、中学・高校時代の友人が進学・就職でマチを離れてゆく一方で、地元に残って働いている青年像も浮かんでこよう。彼らはどのような職場で働き、どのような仲間関係・人間関係をもっているのだろうか。また、彼らは自分たちの住むマチをどのように見ているのだろうか。

アンケートでは彼らの労働の実態を知るには項目が十分でない。ここでは仕事の満足度について見ておこう。「仕事の内容」「収入」「労働条件」「労働時間」「安定性・将来性」「職場の人間関係」の各項目について、「満足」「不満」「どちらともいえない」のどれかを尋ねたところ、不満度が最も高かったのは、農業青年・労働者青年とも共通して「収入」についてであった。労働者青年で満足だという回答が最も多かったのは、「安定性・将来性」であった。これは、今の仕事を選んだ理由の

第1に「安定性」(28%)があげられていることと重なる。しかし、収入への不満が最も高いことに表れているように、それは決して「高値安定」ではない。こうしたなかで、次に満足度が高かったのは「職場の人間関係」であった。言ってみれば、不満を持ちながらも仕事を続けてゆくうえでの支えの一つが、この人間関係なのであろう。

ではこの人間関係は、青年たちの仕事や生活をめぐる不満や不安の解決に役立っているだろうか。彼らの悩みごとで最も多いのは「仕事のこと」(44%)であるが、その相談相手は「学校の同級生や先輩」(28%)、「職場の同僚や先輩」(21%)となっている(図1)。仕事の不満の話相手として、職場の人間関係はある程度役立っているようである。しかしその対応は、個別的なものにとどまってはいるだろうか。一自治体の事例になるが、北海道留辺蘂町でのアンケート調査<sup>(8)</sup>では、仕事上の不満の解決について40%が「特にしていない」と答え、「いままで以上に仕事を一生懸命やる」が19%、労働組合や青年団体など組織活動を通じてという者は7%にすぎない。

「1000人アンケート」に戻ろう。「いま住んでいる町や村が好きですか」との問いには農業青年、労働者青年とも76%が「好き」(「まあ好き」を含む)としている。しかし、「将来もずっと住んでいたいと思いますか」との問いでは農業青年の57%が「住んでいたい」としたのに対して、労働者青年では40%、「移りたい」は15%で農業青年の3倍になった(表9)。

また、「北海道の産業の中で、今後特に振興させるべきものは何だと考えますか」との問いには、37%が「観光・サービス業」と答えている(表10)。一方、「あなたの市町村の、今後中心となるべき産業は何だと考えますか」という設問には、労働者青年の41%が「農業」としているのである(表

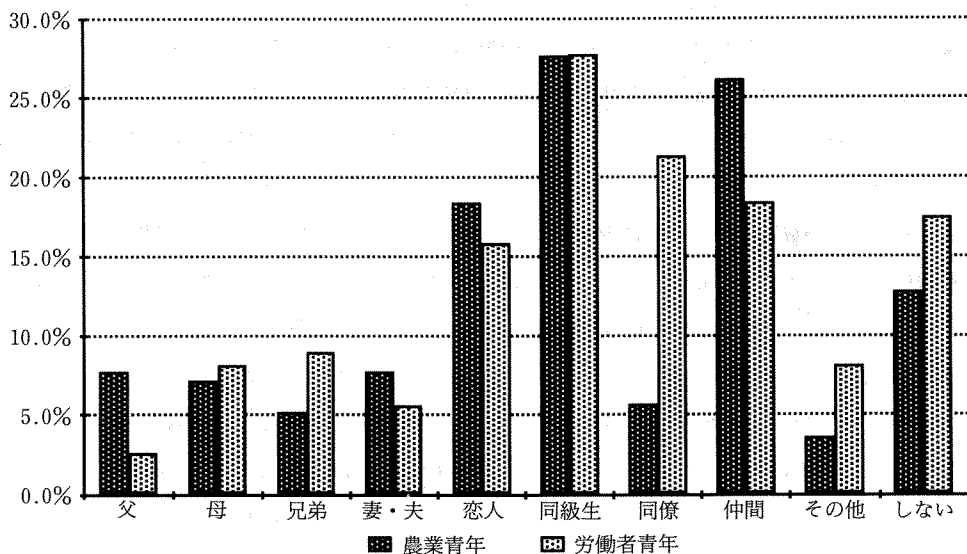


図1 相談相手(職業別)  
(2つまでの複数回答)

11)。

農村の労働者青年たちは、わが町の基幹産業あるいは家の生業としての農業には期待しつつも、町を離れたいという志向がない訳ではない。地域意識や定住意識は揺れ動いている。このような中で青年たちが自らの生活の向上と地域の発展とに取り組む上で、青年運動・労働運動やそこでの学習の果たす役割は大きい。60年代の在村通勤青年の問題についての一連の調査・研究は「在村通勤青年による社会科学ないし系統学習にささえられた学習運動・青年運動と、農民の生産学習・政治学習とをむすびつけることによる地域と国の変革主体の形成を提言」した<sup>9)</sup>。しかし、アンケート調査から北海道の青年の実態を見る限り、労働者青年の生活の問題については個別的な対応にとど

表9 将来もずっと今のところに住んでいたい

	件数	全体 (N=431)	農業 (N=196)	労働者 (N=235)
1. 住んでいたい	204	47.3%	56.6%	39.6%
2. 移りたい	44	10.2%	4.6%	14.9%
3. どちらでもよい	174	40.4%	36.7%	43.4%

表10 北海道で特に振興させるべき産業

	件数	全体 (N=431)	農業 (N=196)	労働者 (N=235)
1. 農林水産業	203	47.1%	64.3%	32.8%
2. 工業	27	6.3%	3.1%	8.9%
3. 商業	28	6.5%	1.5%	10.6%
4. 観光・サービス業	133	30.9%	23.0%	37.4%
5. その他	7	1.6%	0.0%	3.0%

表11 自分の町の中心となるべき産業

	件数	全体 (N=431)	農業 (N=196)	労働者 (N=235)
1. 農業	245	56.8%	76.0%	40.9%
2. 林業	2	0.5%	0.5%	0.4%
3. 漁業	16	3.7%	3.6%	3.8%
4. 工業	16	3.7%	1.0%	6.0%
5. 商業	35	8.1%	3.1%	12.3%
6. サービス業	34	7.9%	6.1%	9.4%
7. 観光業	50	11.6%	4.1%	17.9%
8. その他	5	1.2%	0.5%	1.7%

まっているか、少なくとも青年団ではこうした問題に十分対応できていないことがうかがわれる。自分の悩みを団体・グループの仲間に相談するという労働者青年は18%（農業青年では26%）、誰とも相談しないというものは17%（同じく13%）となっているのである（図1）。

地域で暮らす青年の多様な要求を結集していくうえで、労働者青年を軸の一つとしてゆくことが不可欠であることは、このアンケート結果だけでなく、全国的な運動がすでに示しているところであろう。

#### 4. 青年団活動を支える農業青年

北海道の青年団活動が労働者青年の生活と要求を軸の一つにすることが課題となっている一方で、会員の半数近くを農業青年が占めていることは、この地域の独自性となっている。〈図2〉は道青協が設けている地方区ブロック別に見たアンケート回答者の職業構成である。第1ブロックは石狩・胆振・日高支庁管内、第2は空知支庁管内、第3は網走・十勝・釧路・根室支庁管内、第4は後志・渡島・桧山支庁管内、第5は上川・留萌・宗谷支庁管内に、それぞれ対応している。回答者の構成が会員の構成を正確に反映しているかどうか、ここでは確認できない。しかし、これを見る限り、第4・5ブロックがほとんど労働者青年であるのに対し、第2・3ブロックはまだ6割が農業青年である。しかも、この第2、第3ブロック、すなわち道央・空知地域と道東地域が北海道の中では青年団活動が比較的盛んな地域なのである。また、〈図3〉は「1000人アンケート」と同時期

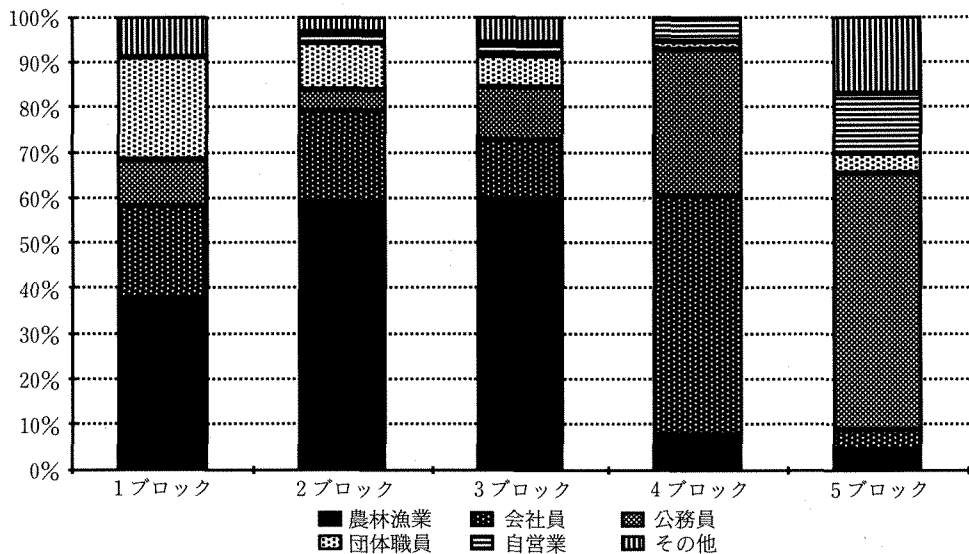


図2 回答者の職業別構成 (ブロック別)

に行われた市町村団の調査から、市町村団役員の職業構成を示したものである。第4・5ブロックを含め、農業青年が市町村団役員の多数を占めており、農業青年が青年団活動を支える層としてなお重要であることがわかる。

農業青年にとっての独自の課題としての農業問題は、これを青年団として取り組んでいるところは今ではわずかである。従って、農業青年中心の活動が労働者青年を含む会員とのギャップを産んでいるところで活動が困難になっているとは、即断できない。むしろ、後志管内真狩村<sup>(10)</sup>や網走管内訓子府町<sup>(11)</sup>のように、青年団と4Hクラブが一部重なりあいながら、独自に農業青年の学習活動が取り組まれているところでは、青年団もまた生きいきと活動しているように見える。

それでもなお活動が困難であるのは、活動を支える農業青年が絶対的に減少しているというだけでなく、2.の②で見たような一見「豊かな」生活やアルバイト・出稼ぎなどの経験によって農業

表12 農業青年のアルバイト

	件数	(N=196)
1. いかない	31	15.8%
2. 1日～2週間	8	4.1%
3. 2週間～1カ月	14	7.1%
4. 1～3カ月	37	18.9%
5. 3～6カ月	72	36.7%
6. 6カ月以上	27	13.8%

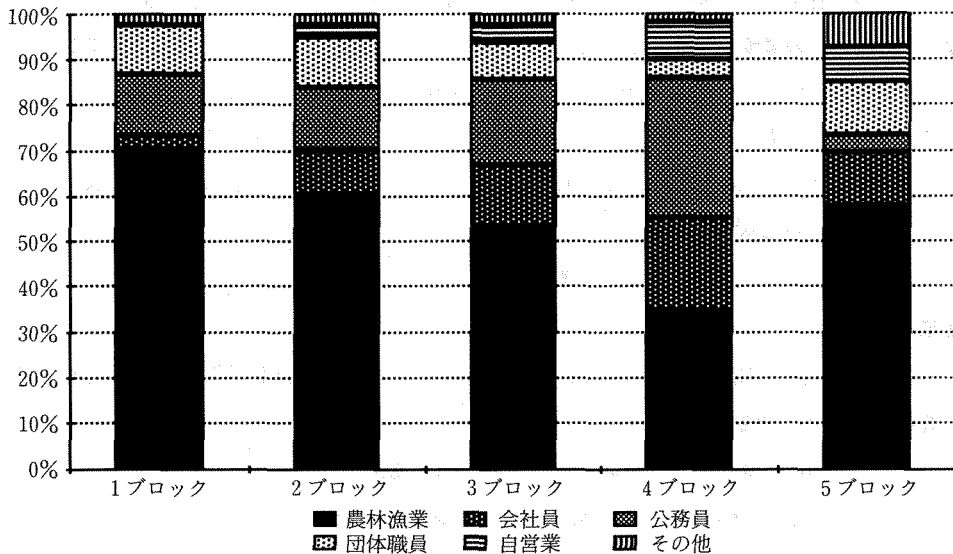


図3 市町村団役員の職業 (ブロック別)

青年の生活と意識が労働者青年のそれに接近する側面をもち、それが従来の活動とのギャップを生んでいるからではないだろうか。アンケートの結果でも、アルバイトに行かないという農業青年は16%だけであり、69%は1カ月以上のアルバイトをしている。そのうち6カ月以上というものも14%いる〈表12〉。この点は、今後くわしく明らかにしていかなければならない。

## 5. おわりに

農業青年と労働者青年という2つの層が、ともに取り組める活動として以前から行われてきたのが、レクリエーション・文化・スポーツ活動である。多くの青年が仕事や生活の不満・不安を抱えているなかで、これらの活動そのものを楽しみ、活動を通じて多くの仲間と語り合う機会をもつことの意義は相変わらず大きい。しかし、それが単なる「うさばらし」や「慰み物」にとどまるなら、こうした活動はやがてゆきづまるだろう。それは、すでに多くの仲間たちが経験してきたことではないだろうか。

青年団活動に対する青年たちの期待には、地域づくりや地域住民との交流、ボランティア活動といったものが少なくない。青年団の地域づくり活動は、さまざまな立場や階層の青年が、同じマチに住む青年どうしという地点に立つことで成り立つものであろう。しかし、一人ひとりの青年が抱えている仕事や生活の不安・不満の解決には、それぞれ独自の課題がある。

いま北海道の少なからぬ青年たちが「青年団ってなんだろう」と模索をしている。それは青年団の担い手が多様になることで、かえって同じ若者どうし、同じマチに住む者どうしの活動から一歩進んで、多様な青年がその共同・協同の力で生活の向上や自己形成・主体形成を遂げることが課題になっている、そのような段階に立ち至っているからではないだろうか。このような段階が、すでに全国的に行われている活動の後追いになるのか、後発先進の活動として新たな提起をしようものなのかは、今後の研究と実践の蓄積によって明らかにされる。当面は今日の北海道における農村青年の存在形態のくわしい検討と、農業青年と労働者青年の、あるいは住民諸階層の相互教育という視点からの実践分析が必要であろう。

### 注記

- (1) 南里悦史・水野光四郎「活動家を通して見た青年団」、青年団研究所『はばたけ青年団』、日本青年団協議会、1982年
- (2) 北海道青年団体協議会『足元を見つめて——組織実態調査アンケートより』、1982年1月
- (3) 同『地域に生きる仲間たち——市町村実態調査報告書』、1987年3月
- (4) 日本青年団協議会『若者たちの自画像——地域青年白書』、1987年
- (5) 大串隆吉「青年の変化と青年教育研究のあゆみ」、日本社会教育学会編『現代社会と青年教育』、

東洋館出版社，1985年

- (6) 泉信三編著『現代日本の青年問題』，日本青年出版社，1970年，p.231
- (7) 栗原るみ「若者にとっての農業・農村」，『日本農業年報 38 農業担い手像の光と影』，農林統計協会，1992年
- (8) 1990年に留辺蘂町に住む18～34歳の働いている青年男女384名に対して行った調査。このうち農業青年は14%，何らかの団体・グループに入っている者は31%である。留辺蘂町教育委員会『留辺蘂町社会教育の現状と問題点（II）』，1991年を参照。
- (9) 大串，前掲
- (10) 鈴木敏正・恒吉紀寿・大坂祐二「『生涯学習の村』の地域づくりと社会教育活動」（北海道大学教育学部『産業と教育 第11号』，1993年）を参照。
- (11) 大坂「地域づくりと青年の自己形成」（山田・鈴木編著『地域づくりと自己教育活動』，筑波書房，1992年）を参照。